

【講演会等報告】

第 29 回北方民族文化シンポジウム 網走
「環境変化と先住民の生業文化—開発と適応—」

小坂みゆき

開催日：2014（平成 26）年 10 月 4 日（土）、5 日（日）

開催場所：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）大会議室

主催：一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

後援：北海道民族学会 ほか

毎年秋に開催される「北方民族文化シンポジウム」は今回が第 29 回となり、昨年の 10 月 4 日、5 日の 2 日間にわたり開催された。『第 29 回北方民族文化シンポジウム 網走』に参加した感想をまとめ紹介する。

今回は、資源開発がもたらす環境変化が、そこで暮らす先住民の生業文化に与える影響がテーマとなっている。世界的にみられる気候変動と人為的な活動である資源開発により、急激に環境変化をみせている北方地域において、特に地域や生業に着目してその状況を検討するという内容が第 26 回（2011 年）からの課題となっている。第 26 回では「陸域生態系における適応」、第 27 回では「海洋生態系における適応」、第 28 回では「家畜飼育、牧畜における適応」と、連続してシンポジウムが開催された。今回の第 29 回では、生業別、地域別、自然環境別の視点から考察することが可能な構成となっていた。

このシンポジウムでは、毎年必ず国内外の研究者や博物館の学芸員、北方地域の先住民が招かれ、講演と討論という形で進められる。今回は、自らがアメリカの先住民グイッチンであり、グイッチンの伝統文化継承者でもあるサミュエル・アレクサンダー氏、ラップランド大学北極センターの研究員であるステファン・デュデュック氏が海外から参加した。開催地、網走にある東京農業大学からは寺澤和彦氏が、主催の網走北方民族文化博物館からは学芸員の種小悠氏が、道外からは城西大学の井上敏昭氏、国立民族学博物館の佐々木史郎氏、首都大学東京からは大石侑香氏が発表した。そして、北方地域に居住する先住民や先住民に関する研究者とは立場を異にする「開発」を進める側の天然ガス・金属鉱物資源機構の本村眞澄氏の発表があった。

シンポジウムは小テーマごと 4 部に分けられていた。北方地域の資源と開発を概観する「北方地域における資源と開発」のほか、「北米における開発」、「ロシア極東地域における開発」、「西シベリアにおける開発」という 3 地域についてそれぞれのテーマに沿った発表がなされた。座長には放送大学のスチュアート・ヘンリ氏、千葉大学の吉田睦氏、北方民族文化博物館の渡部裕氏も加わった。本シンポジウムの構成を以下に示す。

第 1 部：北方地域における開発

「北方林の生態と環境変化の影響」寺澤和彦

「サハリンの石油ガス開発における日本の参画」本村眞澄

第 2 部：北米における開発

「アラスカにおける石油開発と先住民権との関係史」井上敏昭

「変化を認識しながらおこなう伝統的知識の保存」サミュエル・アレクサンダー

第3部：ロシア極東地域における開発

「考古学からみたオホーツク文化の毛皮交易」種石悠

「クロテンの森の先住民：極東ロシアの森林開発・森林保護とウデへの人々」佐々木史郎

第4部：西シベリアにおける開発

「変化する環境におけるハンティの生業—西シベリアにおけるトナカイ飼育と先住民の生存戦略」ステファン・デュデック

「西シベリアの石油採掘と環境変化に対するハンティの反応」大石侑香

第1部：北方地域における開発では、開発の地球環境への影響について、寺澤和彦氏から、世界の1/4を占める北方林の人間活動による環境への影響は、他の森林に比べると、これまで比較的小さかったが、温暖化による凍土の融解などが進んでおり、温室効果ガスの放出などの地球環境に影響のある変化が進行するおそれがあるとの解説があった。また、北方地域の開発への日本の関わりについて、本村眞澄氏からの発表があった。サハリンの石油ガス開発への日本の参画は1918年まで遡るが、その後紆余曲折を重ねながら、ソ連崩壊後、2009年に開始された液化天然ガスの生産ではその約7割が日本に輸出されている。サハリンからの液化天然ガス供給は、日本にとっては、経済性及びエネルギー安全保障の点で重要である一方、ロシアにとっては日本の市場性や高い開発力という点で重要であり、エネルギー面で相互補完的な関係にあるとのことである。これらの開発が先住民の生活にどのような影響を与えているのか、先住民との間に十分な会話がなされているのかなどの質問やコメントなどがでた。それに対し、本村氏からは、先住民も含め住民にとって必ず良い開発になることを目指しそこは妥協を許さない、という返答があった。立場の異なる者同士がシンポジウムを通し議論を展開できたことは有意義である。

第2部：北米における開発では、アラスカにおける油田開発と先住民の関係について、井上敏昭氏から、1960年代後半から北極海岸地帯で活発化した大規模な油田開発は、先住民が伝統的に利用してきた動物資源の生息環境を脅かすものが少なくないこと；開発する側に対し重要な決定への関与を容認の条件とする反対運動の紹介などの報告があった。また、サミュエル・アレクサンダー氏からは、先住民は環境変化を認識するように訓練されていて、すぐに変化に対応している；環境の変化に対しては、物事を積極的かつ丁寧に行い、敬意を示すという、年長者から受け継いできた「良いやりかた」を実行することで、適応していくことは可能だ；環境と調和した生活をおくる方法として、先住民の価値観や行動原理は西欧世界にもゆっくりと認識されつつある、という内容の発表があった。

第2部の終了後、毎年実施されている希望者による北方民族文化博物館の企画展示と常設展の視察が行われた。今回の企画展示は「船、橇、スキー、かんじき 北方の移動手段と道具」で、学芸員の解説などを聞きながら展示を見ることができる。視察のあとは懇親会となる。シンポジウムの参加者のほか、同時通訳の方に、北方民族文化博物館のスタッフ

などと、過去に行われたシンポジウムの内容や、開催までの準備についてなど興味深く会話を楽しむことができた。2日目は、前日の続きとなり、第3部から始まった。

第3部ロシア極東地域における開発では、これに関連してオホーツク文化の毛皮交易の考古学的視点での調査を行った種石悠氏から、出土する動物遺存体の種類や数量等のデータや交易記録上の記述から、オホーツク文化での生活様は、毛皮交易を中心とするものではなく、周囲の多様な資源を利用した環境へ適応していたとの報告がなされた。ソ連崩壊後における極東ロシアの森林開発と先住民族の関係について、佐々木史郎氏から、ウデへの人々が取り上げられた。ソ連崩壊により社会主義国家の経済的背景を失ったウデへの人々は、市場経済を逆手にとり、自らが経営主体となって先住民の権利と自然保護を実現させようとし、これに成功したクラスヌィ・ヤール村の例が紹介され、一方、グアシュギ村のように環境資源自体の劣化のため民営化がうまく進まない例も紹介された。先住民の立場から考えると、狩猟禁止が野生動物・自然保護につながるものなのか再検討する必要があるとの指摘がなされた。

第4部：西シベリアにおける開発では、西シベリアでの開発と先住民の関係について、トナカイ飼育に関連して、ステファン・デュデック氏から、トナカイ飼育民は、生業の切り替えにより生活拠点の移動が可能であったため、独自の伝統的な価値観や文化を維持することができた一方、現在の生活水準は石油産業からの補償金に依存していることが指摘された。大石侑香氏からは、1960年代からの石油産業の本格化に伴い、放牧地の急激な衰退や環境汚染など、ハンティの生活自体にも大きな影響が生じたことから、自らの生活地域の保護活動が盛んになり、1992年には自己の用益権が法定されたとの解説があった。しかし、同時に、石油採掘現場に近い地域での住民の意識は、現在の生活水準の維持には石油産業の存在が経済的に重要であるという認識であり、石油開発の必要性を認め容認するという方向にあることも指摘された。

全発表終了後は全体を通してのディスカッションが行われた。2日間にわたるシンポジウムは専門性の高い内容ではあるが、遠方からの一般参加者も少なくなく、道民カレッジの参加者から質問やコメントが出るなどの場面もあった。このように北方民族文化シンポジウムでは、様々な立場の人と知識を共有するという一面もある。

最後は恒例の記念写真でシンポジウムは幕を下ろした。来年度は節目の第30回ということで、どのようなテーマが掲げられるのか大変興味深い。

参考資料

2014『第29回北方民族文化シンポジウム 網走 環境変化と先住民の生業文化—開発と適応—』発表要旨集、北海道立北方民族博物館

2014『北方民族博物館友の会だより』No.93、北海道立北方民族博物館

(こさか・みゆき／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)